

Title	メエリイ・アグネス・ハミルトンの「ジョン・スチュアート・ミル」
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.3 (1934. 3) ,p.407(107)- 412(112)
JaLC DOI	10.14991/001.19340301-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340301-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340301-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あつて、時に従つて變化し、或はその存在が消滅することさへもが、豫期されないのではない。斯くて或は「婚姻」を以て呼ばれるものが、従來からの内容とは全然異つたものとなることを有り得る。現に財産を有せず、「家」から釋き放されることの比較的遠い無産勞働階級内に成立する「婚姻」の如きは、事實に於いて従來の婚姻概念とは、可なり相違したものと云はねばならぬ。彼等の婚姻こそは、より少く制度的で、より多く人性的である。すなはち彼等こそ婚姻概念の變更に實力を有するものであるが、彼等にして尙ほ、現社會組織の中に在る限り、尙ほ觀念的には全然「家」から解き放たれたものでなく、従つてその婚姻からも、筆者の所謂制度的要素が全然失はれたのではない。然るに思想的にも、實際的にも現經濟組織の機構に依り、全然この組織の中に生活——これを具體的に云へば、私有財産制度の便宜と利益の上に依存するものにして、尙ほその婚姻觀に於いて純個人的思想に徹せんとするものは、實踐的に婚姻より去る以外に、論理的にはその婚姻論は成立し難い。

人はその生活を組織して有つ。これが社會である。斯くて人間は、他の凡ゆる生物とは別にそれ自身の世界を有つに到つたが、一方人間も亦一の被造物なるが故に、他の被造物と同じ生物的(自然的)な制約を脱がれぬ上に、更にいま一つの他の動物に無い社會的制約を受ける。すなはち人は常に二重の負ひめを有つ。婚姻に於いても、婚姻が制度たることから生ずる制約が、婚姻に於ける自然的制約とは別に——他面常にこれと關聯しつつも、それ自體に存する。人が婚姻を觀るとき、この二つのものを併せ觀ることに依つてのみ、その「眞理」は得られるであらう。

附記 本篇は本誌第二十七卷第十一號所載拙稿「婚姻儀式の公示性と婚姻概念の二構成要素」末尾附記に記したる如く、素とされと合せて一段の論述を一應終るものなり。論じて足らざるは他日の機を期す。

メユリイ・アグネス・ハミルトンの

「ジョン・ステュアート・ミル」

高橋 誠 一郎

社會主義の諸先達の生涯と業績とを、こじこまりとした形で示さうとする目的を以つて、昨一千九百二十三年十月から *Makers of the New World Series*. と題する一志六片の傳記叢書が世に現れた。爰に紹介しやうとするハミルトン女史(Mary Agnes Hamilton)の *John Stuart Mill*. も其の中の一冊である。

著者ハミルトン女史は、マンチェスターのオーウェン・カレッジに於ける哲學教授であり、後、アンデュー・イン及びグラスゴオ大學に於ける論理學の教授と爲り、Roger Bacon: the Philosophy of Science in the Middle Ages, 1876. On the Philosophy of Kant, 1879. Fichte, 1881. The Development of Modern Philosophy, 1903. The Development of Greek Philosophy, 1908. Short History of Logic, 1911. 等の諸著によつて知られて居る故ロバート・アダムソン(Robert Adamson)である。アダムソン教授(一千八百五十二年一月十九日生、一千九百〇二年二月五日死)はカウツ(Julius Kautz)の *Theorie und Geschichte der Nationalökonomik*. の第一部 *Die Nationalökonomik als Wissenschaft*, 1858. によつて初めて世に埋れた限界效用學説の創唱者ヘルマン・ハインリッヒ・カウツ(Hermann

ハミルトン・アグネス・ハミルトンの「ジョン・ステュアート・ミル」

一〇七

(四〇七)

Heinrich Gossen)の名を知り、漸くにして彼れの名著 *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln*, 1854. を購入して、獨逸語の知識を缺いて居つたウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズに其の内容を報告し、一千八百六十二年以來自己の理論の斬新を誇つて居つたジェヴォンズをして甚しく失望せしめたことによつて、經濟學史研究者の興味を惹く學者である。(三田學會雜誌「第二十三卷第九號所載拙稿」ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズの書翰に現れたる其の「經濟學理論」參照)。女史はグラスゴオの高等女學校、劍橋のニュナム・カレッジに學び、經濟學の造詣の深い人である。女史は *Less than the Best* 以下、數多の小説及び翻譯の外、亦、傳記の筆を執つたが、就中、比較的新しいものにシドニー及びピアトリス・ウェブ(Sidney and Beatrice Webb)傳及び *Travellers' Library* 中のトーマス・カーライル(Thomas Carlyle)研究がある。女史は又、一千九百二十九年より三十一年に亙り、ランカッシャのブラックバイン市選出労働黨代議士として議會に立ち、英國代表の一員として一千九百二十九年及び三十年の國際聯盟會議に臨み、又遞信大臣のバリアメンタリー・プライベート・セクレタリーを勤めて居つた。現在では、(一千九百三十三年以來)、英國放送會社のガバナーの一人である。

女史に従へば、ジェ・エス・ミルが社會主義の開基者、新世界の建設者中に算へらるゝ所以は、彼れが名聲ある英國の著作家中に在つて、眞率なる尊敬を以つて社會主義を取扱ひ、而して之れに凜然たる威嚴を與へた最初の人であるばかりでなく、第一に、彼れが財富の分配を以つて、當時に在つて疑問の餘地なき所と思惟せられたるが如く、其の性質に於いて准物理的なる不變の諸法則に依存するものではなくして、人々が之れを變更せんことを意圖するや否や直ちに變更し得る人意の事項であることを立證し、而して第二に、彼れが初め承認して居つたりカードオの

賃銀基金説を公然拋棄して、彼れの時代に於ける所謂「古典的」經濟學の基礎を震動せしめたるの事實に基くのである。然しながら、後に述ぶるが如く、ミルが眞に賃銀基金説を拋棄したか如何かは疑問である。(「社會經濟學史」第一卷第四號所載拙稿「賃銀學說史上の生存費説、賃銀基金説及び收益説」參照)。加之、此の學說をリカードオの名によつて呼ぶことも亦、異論がありはしないかと思ふ。勿論、リカードオは同學說の成立史上に極めて重要な地位を有するものではあるが。

著者は、後のフェービアン協會員と幾多の點に於いて類似するものとしてヘンサム學徒を説き、其の鬪將ジェームズ・ミル(James Mill)の人物に就いて物語り、纏がて簡潔なる筆致を以つて其の子ジョン・スチュアートの生涯を叙述する。著者は彼の女がカーライルの研究に際して得たる知識に基き、彼れとミルとの交渉を叙述することが比較的精密である。

ミルは一千八百四十三年に其の最初の出版 *System of Logic* を公にしてから、六十五年に其の *Examination of Sir William Hamilton's Philosophy* 及び *Auguste Comte and Positivism* を出すまでは哲學上の題目に復歸することがなかつた。而も哲學的考察は彼れの全事業を支配するものであつた。然しながらその背景に立つものであつて、前景は政治的であり、社會學的であつた。終始彼れの念頭に懸つて居つたものは、人々は此の地上に如何に生きるか、又彼れ等は如何に生きるを得可きかであつた。彼れは一千八百六十三年の書翰に於いて曰く「私以上に輝ける希望を以つて人類の將來を待望する者は殆んどあるまい。然しながら、私は前途に幾多の危難を見る」と。此れ等の希望を實現し、危難を回避することが彼れの間斷なき事業であつた。

ミルの「經濟學論」は一千八百四十五年秋に着手せられ、同四十七年に脱稿せられた。彼れが經濟學の爲めに行は

んと企圖した所のは、之れを新たな環象に置くこと——實に、之れを、經濟的思索の主體にして、又同時に客體たる人間と關係附くことに在つた。而してハミルトン女史は爰に彼の女が此の著の第一章に於いて略述せると等しく、先づミルが其の著の第一編、生産論から第二編の分配論に移るに當つて、其の間に明確なる區別を劃せることを説き、彼れの論述はダーウソ(Down)以前であるが、而も彼れが其の父及び一般哲學的急進主義者から自己を引き離した主要なる諸點の一は、彼れが歴史的連續を主張し、人々の思索及び行爲方法の上に及ぼす四圍の事情の絶大なる影響を力説せるに在ることを擧示してゐる。次いで、女史はミルが其の「經濟原論」に於いて設けた第二の制限を以つて謂ふまでもなく有名なる賃銀基金説であると做してゐる。一千八百四十八年から同六十九年に至る間に於いて、労働組合主義者及び其の他の者が賃銀を引き上げんと努力せる時、彼れの「經濟原論」は是れ等の人々を打擲する管杖であつた。然るにミルは一千八百六十八年五月、ソントン(Thornton)の著書の批評を *Fortnightly Review* 誌上に公にし、其の中に於いてソントンの賃銀基金説排撃を是認した。(ハミルトンは爰にソントンの著を *The Claims of Labour* と記してゐるが、是れは固より *On Labour, its Wrongful Claims and Rightful Due*, 1869. の誤記であらう)。ハミルトン女史は曰く「此の改説の効果は莫大であつた。舊經濟學の最後の城壘は陥落せるが如くに見えた」と。

吾人は前記二點の中、第一のものに關しては固より女史の所説に異論はないが、第二の點に就いては聊か承服し難いものがある。一千八百六十九年五月に於けるミルの降伏は、半ばは常に其の親戚朋友に厚かつた彼れが、友人ソントンの批判に對して敬意を表し、能ふ限り之れに對して讓歩しやうとした美しい情操の現れであり、半ばは其の晩年に於ける彼れの注意が社會問題に集中するに至れるが爲めであらう。賃銀基金説に關する論争は決して多くの如きミルの非科學的なる降伏を以つて終るものではなかつた。彼れは一千八百七十一年、其の「原論」第七版の序文に於いて、此の問題に關する最近の討議の成果は尙ほ未だ經濟學に關する一般的論述中に編入せらるゝまでに成熟せざる旨を聲明し、而して彼れは僅かに賃銀に關する労働組合組織の力を論じた二章句を變更したのみで、其の賃銀基金説の説明に對しては變更を加ふることなくして過ぎたのである。女史は須らく此の事實に注意を拂ふ可きであつたと思ふ。ミルの「原論」第二編分配論の第十一章以後に於いて論述せられた収益分配論は私有財産制度の下に於ける労働階級の向上發達が甚しく困難であることを表示するが爲めに表明せられたものである。而して彼れは其の分配論の初めに於いて土地及び労働の収益を分配する種々なる様式を考察するに當つて、私有財産の制度を共產主義及び社會主義と比較し、若し果して共產主義が現在行はれつゝある私有財産の制度に比して社會全體の幸福に奉仕することが大であると云ふ事實を明かにすることが出来たならば、須らく之れを採用す可きものと做し、又、第四編の終りに於いて労働階級の將來に對する最後の希望を労働者自身の間に於ける生産組合に懸けたのである。

ハミルトン女史の傳ふるが如く、ミルは其の「原論」に於いて、富及び人口の「靜止的狀態」を豫想した時、彼れは之れを悲ますして、却つて經濟的活動の靜止が單に人間生活の流れをして其の進路を變じて、他の方面に向はしむるものであるかも知れぬと做した。人間の本性に取つて最良なる社會狀態の特徴は、何人も貧窮なる者なき間に、何人もより富裕たる可く欲求することなく、又、自己を前方に推進せんとする他人の努力によつて衝き戻さるゝを怖る可き何等の理由をも有せざるに在る。彼れ曰く「生産の増加は唯り世界の進歩に遅れた國々に於いてのみ猶ほ其の重要な目的たるものである。最も發達せる國々に在つては經濟的に要求せらるる所のもの分配の改良であ

ミルは其の Autobiography, 1873. の有名なる章句中に於いて述ぶるが如く、彼れが「根本的改善の理想は遙かにデモクラシーを超えて進んだ。而してそは確然彼れを社會主義者と云ふ一般的名稱の下に分類せしむ可きものである。然しながら、結局、彼れの社會主義は遠い將來のものである。而して其の遙遠性は、ハミルトンに従へば、第一に「政治的民主主義の效果に關する彼れの樂觀主義と關聯し、第二に、好結果を收め得可き共同所有權のあらゆる形態は、共同團體の成員に、道德的及び知識的教育の高き標準を要求すると做す彼れの見解と關聯するものである。斯くの如き點は彼れの死後、其の養女にして秘書であつたヘレン・テラー(Helen Taylor)のオソリチイによつて一千八百七十九年 Fortnightly Review 誌上に公表せられた Three Chapters on Socialism. 中に特に強調せられてゐる。著者は是れ等の點に重きを置いて社會主義の開基としてのジョン・スチュアート・ミルを傳へんとしてゐる。

## 最近經濟文献

(昭和九年二月二十日調)

### 〔理論經濟學〕

- \*改訂經濟學辭典 改造社編 四六判一・一九六頁 改造社
- \*マルクス地代論に關する二つの批判的研究 カール・テール、ホルトキウキツナ著 渡邊信一譯 四六判二五八頁……
- ……日本評論社
- 精神科學方法論―特にテールタイに就いて―(思想) 一四二號 昭和九・二、三五―五〇頁) 小松 攝郎
- 政治經濟學批判の意味(唯物論研究) 一六號、昭和九・二、一八一―二四頁) 相澤 秀一
- 資本蓄積率變化論補遺(經濟論叢) 三八卷二號、昭和九・二、二〇一―三三頁) 柴田 敬
- 購買力、經濟論叢、三八卷二號、昭和九・二、一六一―三八頁)……小島昌太郎
- ……小島昌太郎
- 勞銀に於ける社會的なるもの―「勢力を經濟法則」に就て―(經濟學論集、四卷一號、昭和九・二、九三―一四六頁)……木村 健康
- 「技術」と「經濟」(國民經濟雜誌、五六卷三號、昭和九・二、一一二―二〇頁) 丸谷 喜市
- 計畫經濟論批判(改造臨時増刊經濟、昭和九・二、三六九―三七

最近經濟文献

五頁)

- 資本主義修正論の擡頭(改造) 一六卷二號、昭和九・二、五六―六九頁) 回坂 逸郎
- \* Bergfeld, W.: Der Begriff des Typus. Eine systemat. u. protiensgeschichte. Unters. Bonn. 1933. XII. 102 S. M. 3.30.
- \* Binder, H.: Das sozialist. System Eugen Dührings. Jena. 1933. VIII. 112 S. M. 5.40
- \* Brendl, O.: Immaterielle Werte und Risiken. Wien. Inst. f. Welt-handelslehre (Verkehrslehre) an d. Hochschule f. Welt-handel. 1933. 96 S. M. 3.50
- \* Brylewski, W.: Die verschiedenen Vorstellungsinhalte des Begriffes Kapital. Stuhl. 1933. 197 S.
- \* Economic essays in honour of Gustav Cassel. London. 1933. 720 p. 30 S.
- \* Feder, G.: Die Aufgaben der Technik beim Wiederaufbau der deutschen Wirtschaft. Berlin. 1933. 24 S. M. O. 30
- \* Feder, G.: Wirtschaftstechnik und Arbeitsbeschaffung. Berlin. 1933. 15 S. M. o.30.
- \* Ferri, C. E.: Discorso sul metodo. [Rede zur Einweihung des Lehrstuhls für korporative Wirtschaft an der Universität